

九螺ささら現象 加古陽

「クラさんがドウマゴ文学賞に選ばれました!」。文化部の女性記者が息せき切つて来て、叫ぶように言った。「クラさん?」。少しずつ脳のシナプスがつながら、「あの九螺ささらさんか!」と結んだ。九螺さんは、東京歌壇(東京新聞の短歌欄)の常連投稿者だった。特選に選ばれると、当時、文化部長だった私宛に丁寧な礼状が届いた。ちよつと不思議で斬新な感覚の歌が印象的だったが、まさかドウマゴ文学賞に輝くとは思ひもよらなかつた。

ドウマゴ文学賞は、東京・渋谷の東急文化村が設けた賞で、毎年一人の審査員が選考に当たる。今年には作家の大竹昭子さんが選び、九螺さんの短歌エッセイ『神様の住所』(朝日出版社)への授与が決まった。ほとんど無名の歌人が初めて書いた本である。この授賞は、短歌界にとって事件と言つていいだろう。

短歌を冒頭に置いて、それにまつわる二ページほどのエッセイが八十四ある。そのすべてのおしまいを短歌で結んだこの本、大竹さんの選評の言葉を借りると、「ふだん使つていない頭の部位がマッサージされるような」感じである。このマッサージはただ気持ちが良いだけではない。読む者の五感を刺激し、思考回路にスイッチを入れる。感覚とか思考の起爆装置のような文章なのだ。「2 さびしいから」は、へさびしくて一個は二個になりましたそして細胞は孤独を失う」という歌に続いて、「さびしいから、」

する」という文章が続く。そこで自分なりの「さびしいから」を浮かべたところで、ずばつと「へさびしいから」はとても怖い。／実は、エゴの丸投げだからだ」と決めてくる。全体を通して、なんとなくふわんとした雰囲気をもたらしながら「18 エロス」では、へ死体みたいきみの寝姿死に神から守るためきみを端まで舐める×雌雄雄分けしようなきみの指わたしをふかくよく見つけてる」と、ドキツとするような性愛の歌を織り交ぜる。

九螺は哲学を好む人のようだが、確かに生きとし生けるものや宇宙、真理などを思索し、言葉を通じてよく表現している。

それにしても、九螺の言いきりは鮮やかで、ときどき丸め込まれそうになる。へ性愛とは、シユガーコーティングした命令だへなるほど! へ宇宙とは、点在する濃密であるへなるほど! へシベリアとは、美しき喪失であるへなるほど! とまあ、

こんな具合である。よく考えれば、突っ込みどころはあるのだが。

続いて出た歌集『ゆめのほとり鳥』(書肆侃侃房)と合わせて読んでみても、九螺は感情のゆらぎや人生の経験の歌に託すタイプではなく、完全に言葉派の歌人である。思考や想像、そして言葉そのものから歌の世界を構築していく。ほぼすべて口語で詠まれる歌は、ひねつた世界観や語呂の良さを大事にする一方で、定型意識は緩やかに感じられる。半面、緩やかであっても定型意識があるために、歌の韻律に大きな違和感は生じない。

掉尾を飾る「84 幸福」で、九螺は「信じるべきものは、すべて言葉になっている。／そして、言葉になろうとして」と書く。思考の末に一つの結論に到達した九螺は、これからも「信じるべきもの」を歌と文章にし続けるのだろう。